

2010 年度 リーディング・ユニバーシティ募金による「地域リーダー育成」助成金 活動総括

現代福祉学部 関司直也
人間環境学部 西城戸誠

【テーマ】多摩地域における資源活用・保全のサポーターづくり—情報発信ツールの活用による地域活性化の試み—

【活動のねらい】

本活動は、現代福祉学部の関司ゼミと人間環境学部の西城戸ゼミの教員の専門分野である地域経済学と環境社会学を相互に連携させ、広義の「地域資源」の活用と保全の両面をサポートするために不可欠な、地域住民と学生との協働の学びの場を構築し、継続的な活動につながる基盤づくりを試みた。具体的には、東京・多摩地域を中心に情報発信ツールを活用する2つのプロジェクトを展開し、学生が資源活用・保全の実践に関わりながら、地域の実践者を取材し、モノ（物質）、コト（社会関係・組織）、ココロ（価値観）の側面から、現場の「生の動き」を理解し、情報発信を行うことで、緊張感と責任感を伴いながら、地域貢献、社会貢献役割を担う経験を蓄積することを通して、「地域リーダー」の素養を高めることをねらいとした。

【活動内容】

<第1プロジェクト>

地域情報ポータルサイト「まいぷれ八王子」の特集コンテンツ「よっ！仕事人」の取材作業とコンテンツ作成（担当：関司）

全体として、前期に4ヶ所、後期に4ヶ所について、八王子市内のものづくりに従事する企業や経営者の方への取材（ヒアリング調査）を行い、その内容を編集して、まいぷれ八王子の特集コンテンツとして反映することができた。

活動年間の活動としては、4～5月に事前学習として、多摩地域の特性やヒアリング調査に対する心構えについてテキスト中心に学び、5月から、3～4人で班を作り、初回の取材を4ヶ所（磯沼ミルクファーム（酪農業）、大竹絹織（織物加工）、夕焼本舗万年屋（菓子製造販売）、オーディオテクネ（音響機器製造））で実施した。取材先の選定・調整については、多摩地域のものづくり企業を支援する社団法人首都圏産業活性化協会（TAMA協会）の坂倉さんと「まいぷれ」を運営する株式会社システムインテグレート町野さんに、先方の意向を踏まえて予め打診を進めて頂き、その後、ゼミ生自身でアポ取りからセッティングを進めた。取材後、ゼミ内で相互の取材先の報告を行うことで自らの経験を伝え、その後、班別に取材メモを整理し、コンテンツの作成、編集作業を進めた。ゼミ生としては、初めて大学近隣のものづくりの現場に触れ、信念を持つ「仕事人」の姿勢から多くを学んだように見受けられる。

後期に入り、初回ゼミにおいて前期の反省会を実施し、協力者の坂倉さん、町野さんにも参加頂いた。前期の作業は初めてにも関わらず、各班とも概ね順調に進行したが、ゼミ生からは、事前準備、ヒアリング技術や Web コンテンツの作り方について細かく改善点の指摘がなされた。また、取材日

が平日のため、授業時間との関係からグループ全体での活動が進めにくく、取りまとめ時期も試験期間に当たったため、作業の進捗が遅れるなど、若干進め方に検討の余地を残した。

後期は、ゼミ生から希望する調査先のアンケートを実施し、それをもとに、坂倉さん、町野さん、図司との間で調整を進め、取材先として、米蔵人・城定商店（米穀店）、鈴木合金（金属加工）、もちとし（菓子製造販売）、燻製工房 Goutez（食品加工販売）の4ヶ所で、前期と同様のプロセスで実施した。後期は実質的に年内に編集作業を終える必要もあり、各班とも慌ただしく活動を進めたが、2回目の作業ということもあり概ね順調に進行した。後期最終ゼミにおいて、坂倉さん、町野さんを変え、後期の反省会を実施し、今年度の活動を終了した。次年度においても、継続の方向でまいふれ事業部とTAMA協会とも調整を進める予定にしている。

また、冬休み期間中に、農山村地域（中山間地域）における集落とゼミとの交流活動に向けて、教員やゼミ生有志で、福島県喜多方市、新潟県小千谷市に打ち合わせに出向いている。これらの2地域は図司が現地調査等の研究活動を通して接点を得た地域であり、先方からも学生との交流を地域活性化の手段として戦略的に考えている地域である。第1プロジェクトを発展させる「地域リーダー育成」関連活動として位置付けている。

<第2プロジェクト>

日野市における用水路保全や都市農業に関する映像アーカイブスの構築（担当：西城戸）

第2プロジェクトでは、東京都日野市をフィールドとして、用水路班（農業用水、環境用水）、都市農業班、環境教育班に分かれて、地域社会の実践者とともに活動に参加しながら、その内容を調査し、実践する当事者のモノ、コト、ココロを理解し、その情報発信を行うことで、参加学生が地域連携・社会貢献を担う経験を蓄積し、「地域リーダー」の素養を高めることを目的としていた。

4・6月は先行研究、調査報告書等の講読と街あるきを実施し、フィールドの土地勘を養うとともに地域の課題に関する理解を深めた。7月以降は、参加学生の関心を踏まえて班に分かれて、テーマに関連した実践者（農家、用水組合のメンバー、行政、学校関係者、一般市民など）に聞き取り調査を実施した。回数等は班によって異なるが、どの班も単に一、二回訪問した程度にとどまらず積極的に現地訪問を重ねたことは明記しておきたい。さらに、用水組合の堀さらい、用水路掃除、農作業、環境教育の実践への関わりなど、地域の実践者とともに現場で汗をかく作業についても積極的に参加した。このような学生の姿勢は、後述するように、地域の実践者との信頼関係を構築することにつながっただけではなく、調査データ、知見の質を高める効果も生んでいる。

調査研究は1月まで実施され、2月上旬に、日野市民にもお越しいただき、研究発表会を実施した。また2月下旬に報告書を作成した。現在、印刷中である。

【活動の成果】

<第1プロジェクト>

活動の成果として、一連の経験が様々な場面でゼミ生の成長に繋がっていることが大きい。ゼミ生の先方へのアポイント取り、取材を通しての会話のやり取りなどの経験は、現場に向き合う姿勢と責任感を高めている。また、取材内容をWebコンテンツに編集する過程でも、見出しの付け方や内容のまとめ方、写真の取り扱いを通して、取材先のひとや仕事の魅力をどのように伝えることが有効か、作業

を通して表現力を養うことにもつながった。取材経験を年間に2回重ねることで、前回の反省点を次回に活かそうとする成長の姿勢も見受けられた。

今回の多摩近郊での一連の活動は、今年度から試験的に開始した農山村地域（中山間地域）における集落とゼミとの交流活動にも大きな効果を及ぼしており、農山村集落で戸別訪問を行い、住民の方への聞き取り調査を行った際にも、1戸当たり平均2時間、長いところでは3時間近く、地元の方との会話が弾んだこともあり、大学周辺での日常的な基礎コミュニケーション力の養成に大きな成果を上げたと言える。

このような一連の活動が展開できた要素として、本学と繋がりのある外部機関との連携が図れたことが大きい。TAMA協会の坂倉さんは本学部のOGでもあり、学部の理念やゼミ教育への理解が深く、協会会員であるものづくり企業からの取材先の選定や調整にご尽力頂いた。また、「まいぷれ」を運営する株式会社システムインテグレート担当者である町野さんも、本学社会学部のOGでありながら、多摩地域で地域情報のポータルサイトを運営しており、現地取材の設定や編集作業での学生への指導にお力添え頂いた。このように、教員側が教育的な側面を持ち、また現地で活動する外部機関が地域で活動する上での戦略的な側面を持って、相互の立場を理解しながら、連携できる関係を構築できたことは、大学と地域がつながる着実な一歩に繋がった部分であろう。

<第2プロジェクト>

活動の成果として、参加学生の社会調査の一連の技術、コミュニケーション能力が上がり、さらに地域の実践者や地域リーダーへの理解が深まることによって、地域リーダーの素養を高めることができた。

また、参加学生と地域の実践者との信頼関係が構築できた点も、本プロジェクトの成果として挙げられる。上述した「汗をかく」実践は、社会調査を実施する上で、これらの営みは信頼関係を構築する上で重要であり、理系のまちづくり研究にありがちな、単に街を歩いて眺めるといった営みでは、当事者のモノ、コト、ココロを理解できないという地域に関わる基本的なスタンスを学生は理解することとなった。

さらに、このような地域との関わりは、調査研究のデータの質にも大きく影響している。学生が地域の実践者とともに寄り添うことによって、例えば、日野市の農業政策と用水路保全政策のアンバランスさ、「景観の美しさ」だけを唱える研究者の無意味性、エコや環境、緑、水のためという都市のあり方の提示が、一見よさそうに見えて、実は地域住民や地域社会にとっては暴力装置として働きかねないという視点でも捉えられる経験を参加した学生は得ることができた。これらの経験および調査内容は、学生が執筆した調査報告書の中でも反映されており、地域研究として地域のリアリティを描き出したという点において大きく評価できると思われる。

付加的な成果として、堀さらいや用水路清掃などの実践が日野市の広報から取材を受けたことも、法政大学としての地域連携（貢献）の一助となったといえる。

【今後の課題と展望】

当初は、東京・多摩地区において2つのプロジェクトを展開し、両ゼミの学生が相互参加することを想定していたが、実際には、キャンパス間の距離と活動時間の折り合いがつきにくく、ゼミ生同士の顔合わせや共同作業の機会を作ることが難しかったため、各プロジェクトをそれぞれのゼミ生が担当する形に収斂してしまった。しかし、西城戸、図司とも、キャンパスの枠を超えて、ゼミ生が相互

交流を深めることの有効性は認識しており、次年度以降も、それぞれのプロジェクトの活動を継続させながら、別途、相互の学生が参加しやすいフィールドワークの開拓や、年度末に活動報告会をゼミ合同で開催するなど、今年度の反省に立った展開を模索したいと考えている。

第1プロジェクトについては、今年度が初の試みながら、現場との関係構築やヒアリング経験の蓄積として大きな成果を上げたことから、次年度以降も継続させながら、新たにゼミに入る2年生向けのプログラムとして定着を図っていきたいと考えている。ただ、個々の取材先がコンテンツとして完結してしまい、多摩地域の地場産業や地域経済との関係から、その存在を俯瞰的な理解につなげるまでには至らなかったことから、事前学習のあり方などについて工夫の余地はまだあり、活動に協力頂ける外部機関とも議論を重ねたい。

第2プロジェクトについては、報告書という形であるが、テキストレベルでの調査データのアーカイブ化は達成したが、映像アーカイブの段階にまでは達することができなかった（準備段階、およびそのノウハウに関する課題までは把握できた）。次年度以降の課題としたい。また、第1プロジェクトとの関連について言えば、環境と福祉というテーマの交差点としての都市農業という対象と、その具体的な調査研究課題を明らかにすることができた。また、現代福祉学部と人間環境学部の学生の交流、共同調査プロジェクトの遂行のための人的基盤を作ることができたのではないかと考えている。

本活動では、市ヶ谷と多摩の各キャンパスの学部ゼミが連携して活動する前例の少ない試みであり、物理的な側面で乗り越えるべき課題が多いが、教員同士が学部の枠を超えて、それぞれの専門分野を連携させながら、ゼミ生と共に現場の課題に向き合う姿勢は大切な視点である。今年度は、各ゼミでのプロジェクト活動に収斂してしまったが、そこから得られる現場に向き合う緊張感や責任感は、今後の学生生活や社会に出てからの職業にも大きく活かされる素養であり、間接的でも地域リーダー育成の一助に足る活動が展開できたものと考えている。

以上

学生報告書

<第1プロジェクト>

1. 活動スケジュール

私たち図司ゼミナールは1年間を通して、システムインテグレートの町野さん、TAMA協会の坂倉さんの協力のもとに「まいぷれ」の活動を行ってきました。「まいぷれ」とは、地域住民に自分たちの地域を好きになってもらうための地域情報サイトです。そこで私たちは、八王子地域の情報を集積して、誰もが自由に利用できるコンテンツ作りを行いました。

<1年間の活動内容>

- 4月…「まいぷれ」編集部の町野さん、坂倉さんと初の顔合わせ。地域の魅力ある仕事人を見つけて取材・レポートをする「よっ！仕事人」の特集コンテンツの作成が決定。
- 5月…第1回取材先の決定。取材先別に班に分かれて事前学習。
- 6月…各班取材先へ。コンテンツ作成。
- 7月…コンテンツ作成。データベースにアップ。
- 9月…第2回の取材先に向けての話し合い。
- 10月…第2回取材先の決定。取材先別に班に分かれて事前学習。
- 11月…各班取材先へ。コンテンツ作成
- 12月…コンテンツ作成。データベースにアップ。
- 1月…まとめ、反省。

2. 取材先の概要と内容

*第1回取材先

・磯沼ミルクファーム

「ミルクは愛情から生まれる」という考えのもと、先代から続く独特な手法で牧場を経営。直売所で売られるオリジナルのヨーグルトや牛乳はどれも絶品。

・大竹絹織

織物の町八王子を守る絹織物工場。消費者のニーズに合わせた様々な製品を生産。また、自社製品の開発にも力を入れている。工場の見学も積極的に受け入れており、子どもたちに織物の魅力を伝えている。

・夕焼本舗 万年屋

八王子ブランドの「高尾山」や「夕焼け小焼け」にちなんだ和菓子作りを展開している。また季節にちなんだ彩り豊かな和菓子や酒まんじゅうが一押し。

・オーディオテクネ

オーディオ機器開発会社。その技術は海外でも高く評価されていて有名。元に音に近い「正しい音」を再現するオーディオづくりにこだわりをもっている。

*第2回取材先

・米蔵人 城定商店

様々なお米の種類を紹介や美味しいお米の炊き方も教えていただけるお米のスペシャリスト。実際

に全国各地に足を運んで仕入れてきたたくさんのお米を扱っている。

・鈴木合金

顕微鏡の部品やデジタルカメラのフレームなど様々なものに使われている合金が作られている工場。鋳造業という私たちにとっては普段あまり馴染みのない現場では、職人さんの熱気が伝わってくる。

・八王子銘菓 もちとし

和菓子に欠かせない小豆に特にこだわりをもっている。八王子には比較的和菓子屋さんが多く存在するため、八王子全体で和菓子売り出そうとする動きにも協力している。

・燻製工房 Goutez

フランスでの修行経験もある職人さん。同じ味を作り続けるとともに、お客さんに喜んでもらうために遊び心あふれる新商品作りにも力を入れている。

3. 活動してみたの感想

自分たちの生活に深くかかわっているようで、実は全く知らない職人さんたちの世界をのぞき見ることができて良かったです。各職人さんでそれぞれのこだわりがあって、実際に話を聞くことでその熱い思いを感じることができました。実際に職人さんの技を見ることができたところもあり、とても貴重な経験でした。

すべての取材先で共通して感じたことは、地域を大切にしているということです。八王子という地域を売りにしている職人さんもいて、地域活性化に大きく貢献しています。また、取材先の方々のみならず私たちが快く受け入れてくれたことにとっても感謝しています。

自分の住む地域に誇りをもつことは素晴らしいことだと思います。もともと自分の地域が好きで住んでいるのかもしれないけれど、まだまだ地域には知らないことが多く隠れていて、それを知っていくことでさらに好きになれると感じました。

今回、取材先で印象に残った出来事をすべて記事にして、多くの人に伝えられるよう努力しましたが、まだまだ力不足だったと思います。さらに良い記事をつくり上げるには、より地域とのコミュニケーションが求められるのだと思います。(川口琴美)

仕事内容や生活のことはもちろん、八王子市の職人さんにスポットを当てて、という事だったので取材では八王子の歴史や現在までの移り変わりも意識的に掘り下げてみた。取材先も歴史ある老舗が多かった為、興味深い話を聞く事ができた。取材先では生い立ちから近年の経済界事情までかなり幅広い質問をぶつけてみた。そこで感じたのはみなさんやはり経験が豊富だということ。様々な経験をしてきたからこそその話の重みだったり知識の豊富さがあった。(甲斐滉平)

4. 今後(卒業後)にどのように生かしていけるか

今回の活動を通して、自分たちの知らない世界が多く存在するということ、また取材と、記事作りの難しさを深く感じる事ができました。

新しい世界に飛び込むことは難しいですが、今後そうした経験に数多く直面すると思います。「まいぶれ」での取材の流れや、記事作りの経験を生かして、いつでも自分の伝えたいことを確実に多くの人に伝えられる人になりたいです。

また、今回八王子の職人さんというテーマをクローズアップする中で、絞られたテーマから良いと

ころを多く見つけ出していく力を身につけました。今後社会に出た時、その力を役立てていきたいと思います。(川口琴美)

今後生きていく上でこの「経験」というものが大事になってくると痛感した。社会に出る前、つまり一般的に大学4年間で、自ら行動を起こし、様々な経験を得ることが大事なのだと気づく事ができた。それだけでなく、1年を通じた活動で、目上の人との話し方から、インタビューした記事を文面に起こす技術、ネット上に文面を記載する責任感まで、今後役立つであろう多くの事を学ぶ事ができて本当に良かった。(甲斐滉平)

■まいづれ八王子市：よっ！仕事人 掲載サイト：http://hachioji.mypl.net/mp/work_hachioji/

(取りまとめ：現代福祉学部 図司ゼミ2年 09J1110 川口琴美・09J0402 甲斐滉平)

<第2プロジェクト>

◆ 活動内容

◇ 農業用水班：

農業用水班では「これまでの用水路と人のかかわり方を今一度振り返り、これからの用水路維持管理の方向性を考えていくこと」を目的に豊田用水の維持管理を行っている豊田堀之内用水組合の方々へのインタビュー調査を約20件行いました。インタビューでは維持管理における人手不足や金銭面での問題が明らかになると同時に、「用水は確かに減ってきてしまっているけど、完全になくなってしまふのはさみしい」「組合の仲間と顔を合わせて、昔の思い出を語らうのが楽しみ」といった声が聞かれました。用水への愛着が組合への愛着へとつながり、一つの地域コミュニティとして用水組合が機能しているのではないかと考えています。

◇ 環境用水班

環境用水班は、環境用水としての持続可能性についてというテーマを設定し、東京都日野市を事例に調査を行ってきました。活動内容としては、まず、環境用水とは何かといったところから始め、日野市の用水路保全の変遷をたどり、先行研究から環境用水として用水路を保全している地域を調べ、そこで得た知識を元に日野市に実際に行き、市民の方や行政の方に聞き取り調査を行いました。これらの活動を通して、環境用水として保全していくには農業用水よりも重要性が低くなってしまうということ、用水路保全に対する市民の関心が低いこと、行政だけでは用水路を維持していくことは難しいということがわかりました。

◇ 環境教育班

環境教育班は、「市民が行う環境教育の意義とは何か」という観点から、日野市の小学校における「地場産野菜等を利用した学校教育」と「水辺の楽校」について調査しました。給食展、大豆プロジェクト、水辺の学校、農業体験、地域清掃などへの参与観察、栄養士、学校長、教員、市民団体などへの聞き取り調査等を行い、それを通して以下のことがわかりました。環境教育の成立条件は、一つ目に、地域を巻き込んだ環境教育は「核」となる市民の思いがあることです。二つ目に、子どもたちのふれあいが地域市民や農家のやりがいにつながっていること、三つ目に、保護者とのコミュニケーション

や情報公開により理解を得ていることです。これらから、地域への「愛着」が活動への市民参加の原動力となっていることと考察しました。日野市の豊かな自然環境を利用した環境教育は「地域のアイデンティティ」としての役割を担い、地域の一員である子どもたちへ地域の良さを伝えるツールになっていると考えました。

◇ 農業班

農業班では、衰退傾向にある日野市の都市農業において、どうしたら維持・発展させていくことができるのかという観点で、日野市の農業に関する取り組みの一つである「援農ボランティア」からみる市民参加のありかたについて調査しました。先行研究を踏まえた上で、農家、元農家、援農ボランティア、JA職員などの方へインタビュー調査を行い、現状や課題などを聞き取りました。そこでボランティアのありかたとして無償・有償という点にポイントを絞り、調査を進めた結果、市民が取り組みに参加する動機がバラバラであり、農業を守るということに関しては、難しいということがわかりました。目的を市民・農家で共通させ、それに沿って活動していかないとチグハグな活動になってしまいます。逆に、共通した目的を持ちながら活動していけば、実際農家の力になっていることは事実なので、市民が参加する意義というのは見出していけると考えています。

◆ 今後

今年度の調査を終えて、率直な感想としては、知りたい情報を得ることの難しさを実感しました。私たちは、調査の方法としてインタビュー調査を多く行いました。インタビュー調査は相手が人であるが故、正直データとして正確さに少し欠けるものだと思うのですが、そんな中でも確かな情報を聞き出すためには信頼関係の構築の大切さを肌で感じました。調査内容が個人のデータになるため、信頼関係がなければ話してはいただけないので、そのために地域の用水路清掃、農作業のお手伝いなど、直接調査に関係ないことにも参加し、私たちの顔や調査の意図をしっかりと知ってもらうことを意識しました。その結果、当初と比べ、円滑に調査を進めることができました。これらの経験を生かし、今後も調査や研究を行う際には、このことを大切に、人と密に関わる楽しさを感じながら、より正確な調査をしていきたいと考えています。また卒業後、社会人になったときにも、今回の調査で得た知識や考え方、聞き取るスキルを仕事の中で生かしていきたいです。特に地域社会の中でさまざまな活動を展開するリーダーの方の振る舞いは、自分自身が地域社会や集団の中でのリーダーとなる際のお手本になると考えています。

(取りまとめ：人間環境学部 西城戸ゼミ 3年 08H0513 日下洋太)